

夫それおもんみ以いわゆるれば重病りょうじを療治ろうやくするには良薬こうさくを構築ぎやくし、逆ぼう・謗くじよを救助ようぼうするには要法しには如かず。所謂い時を論ずれば正いぎやく・像みぎやく・末いぼう、教を論ずれば小大みぼう・偏円しよぼう・権実しよせん・顕密、国を論ずれば中辺の両国、機を論ずれば已逆いぎやくと未逆みぎやくと、已謗いぼうと未謗みぼうと、師を論ずれば凡師しよせんと聖師しよせんと、二乗と菩薩と、他方たほうと此土しどと、迹化しゃっけと本化ほんげとなり。故に四依の菩薩等、滅後に出現し、仏の付嘱ふぞくに随みだつて妄みだりには経法を演説しよせんしたまはず。所詮無智しよせんの者、未だ大法を謗しよせんぜざるには忽たちまちすてに大法を与じつだいへざれ。悪人すてたる上已じつだいに実大を謗しよせんずる者には強しひて之を説くべし。法華經第二の巻に、仏、舍利弗しゃりほつに対して云はく「無智しよせんの人の中に此の経を説くこと莫なかれ」と。又第四の巻に薬王菩薩等の八万の大士に告やくおうげたまはく「此の経は是諸これ仏秘要ひようの蔵みだなり、分布みだして妄みだりに人に授与しよせんすべからず」等云云。文の心は無智しよせんの者しよせんのも未だ正法を謗しよせんらざれば、左右な無く此の経を説くこと莫なかれ。法華經第七の巻不輕品ふきようほんに云はく「乃至ないし遠く四衆ししゆを見ても亦復またまたことさら故ゆに往ゆいて」等云云。又云はく「四衆しんの中に瞋恚しんを生じ、心不淨あつくめりなる者有いずり。惡口罵詈いずして言はく、是の無智しよせんの比丘いず、何れの所より来たりて」等云云。又云はく「或は杖木じょうもく・瓦石がしゃくを以て之を打擲ちようちやくす」等云云。第二・第四の巻の經文と第七の巻の經文と天地水火せり。

問うて曰く、一經二説、何れの義に就いてか此の経を弘通すべき。答へて云はく、私えつうに会通りようぜんすべからず。靈山てんだいだいしの聴衆みようらくたる天台大師並びに妙樂大師等処々に多くの積有ちちゆうり。先づ一兩の文を出ださん。文句もんくの十に云はく「問うて曰く、釈迦ちちゆうは出世して跏趺あつくめりして説かず。今は此何の意ぞ、造次ぞうじにして説くは何ぞや。答へて曰く、本已もとに善有もとるには釈迦しよご小を以て之を將護しよごし、本未だ善有しよごらざるには不輕大を以て之を強毒ごうどくす」等云云。釈の心は寂滅じゃくめつ・鹿野ろくや・大宝だいほう・白鷺びやくろ等の前四味のぜんしみ小大・権実の諸經・四教・八教の所被の機縁、彼等の過去を尋ね見れば、久遠だいつう・大通しゆくだの時に於て純円の種を下せしも、諸衆、一乘経を謗しよせんぜしかば三・五の塵点じんてんを経歴きようりやくす。然りと雖も下せし所げしゆの種、純熟の故に時至なつて自づから繫珠けいじゆを顯なはす。但四十余年の間、過去に已に結縁けちえんの者も猶謗なの義有るべきの故に、且しく権小の諸經を演説して根機ねを練らしむ。

問うて曰く、華嚴の時の別・円の大菩薩、乃至觀經等の諸の凡夫の得道は如何。答へて曰く、彼等の衆は時を以て之を論ずれば其の經の得道に似たれども、実を以て之を勸かんがふるに三・五下種の輩なり。問うて曰く、其の証拠如何。答へて曰く、法華經第五の巻涌出品ゆじゆっぼんに云はく「是の諸の衆生は世々より已来、我が化を成就せり。乃至此の諸の衆生は、始め我が身を見、我が所説を聞いて、即ち皆信受して如来の慧に入りだつにき」等云云。天台しゆじようくおん積して云はく「衆生久遠」等云云。妙樂大師の云はく「脱は現に在りと雖も具つがさに本種を騰あぐ」と。又云はく「故に知んぬ、今日の逗会こんにちは昔成就するの機とうえに赴おもむく」等云云。經釈けんねん顯然の上は私の料簡りようけんを待たず。例せば王女と下女と天子の種子おうによを下げさゞれば国主と為らざるが如し。

問うて曰く、大日經等の得道の者は如何。答へて曰く、種々の異義有りと雖も繁きが故に之を載せず。但し所詮は彼々の經々に種・熟・脱を説かざれば還<sup>かえ</sup>って灰断<sup>けだん</sup>に同じ、化に始終無きの經なり。而るに真言師等が所談の即身成仏は、譬へば窮人の妄りに帝王と号して自ら誅滅<sup>ちゅうめつ</sup>を取るが如し。王莽<sup>おうもう</sup>・趙高<sup>ちようこう</sup>の輩は外に求むべからず、今の真言家なり。此等に因<sup>よ</sup>って論ぜば、仏の滅後に於て三時有り。正・像二千余年には猶下種の者有り。例せば在世四十余年の如し。機根を知らずんば左右無く実經を与ふべからず。今は既に末法に入<sup>い</sup>って、在世の結縁の者は漸々に衰微して、権実の二機皆悉<sup>ことごと</sup>く尽きぬ。彼の不輕菩薩、末世に出現して毒鼓を撃たしむるの時なり。而るに今時の学者、時・機に迷惑して或は小乗を弘通し、或は権大乘を授与し、或は一乗を演説すれども、題目の五字を以て下種と為すべきの由来を知らざるか。殊に真言宗の学者は迷惑<sup>いだ</sup>を懐いて三部經に依憑<sup>えひよう</sup>し、単に會二・破二の義を宣べて猶三一相對を説かず。即身頓悟の道跡を削り、草木成仏は名をも聞かざるのみ。而るに善無畏<sup>ぜんむい</sup>・金剛智<sup>こんごうち</sup>・不空<sup>ふくう</sup>等の僧侶、月氏より漢土に來臨せし時、本国に於て未だ存せざる天台の大法、盛んに此の国に流布せしむるの間、自愛所持の經弘め難きに依り、一行阿闍梨を語らひ得て天台の智慧を盗み取り、大日經等に撰入<sup>しょうにゅう</sup>して天竺より有るの由之を偽<sup>てんじく</sup>る。然るに震旦一国の王臣等、並びに日本国の弘法・慈覺の兩大師、之を弁<sup>わきま</sup>へずして信を加ふ。已下の諸学は言ふに足らず。但漢土・日本の中に伝教大師一人之を推したまへり。然れども未だ分明ならず。所詮善無畏三蔵、閻魔王の責めを蒙<sup>えんまおう</sup>って此の過罪を悔<sup>こうむ</sup>ひ、不空三蔵の天竺に還り渡<sup>かさい</sup>って真言を捨て、漢土に來臨し、天台の戒壇を建立して兩界の中央の本尊に法華經を置きし等是なり。

問うて曰く、今時の真言宗の学者等、何ぞ此の義を存せざるや。答へて曰く、眉<sup>まゆ</sup>は近けれども見えず、自らの禍<sup>わざわい</sup>を知らずとは是の謂か。嘉祥大師は三論宗を捨て、天台の弟子と為る。今の末学等之を知らず。法蔵・澄觀は華嚴宗を置いて智者に歸す。彼の宗の学者之を存せず。玄奘三蔵・慈恩大師は五性の邪義を廢し一乗の法に移る。法相の学者堅く之を諍<sup>あらそ</sup>ふ。問うて曰く、其の証如何。答へて曰く、或は心に移して身に移さず、或は身に移して心に移さず。或は身心共に移し、或は身心共に移さず。其の証文は別紙に之を出だすべし。此の消息の詮に非ざれば之を出ださず。

仏の滅後に三時有り。所謂正法一千年の前の五百年には迦葉・阿難・商那和修・未田地・脇比丘等、一向に小乗の薬を以て衆生の輕病を対治す。四阿含經・十誦・八十誦等の諸律と相續解脫經等の三蔵とを弘通し、後には律宗・俱舍宗・成実宗と号する是なり。後の五百年には馬鳴菩薩・竜樹菩薩・提婆菩薩・無著菩薩・天親菩薩等の諸の大論師、初めには諸の小聖の弘めし所の小乗經之を通達し、後には一々に彼の義を破失<sup>はしつ</sup>し了<sup>おわ</sup>って諸の大乗經を弘通す。是又中薬を以て衆生の中病を対治す。所謂華嚴經・般若經・大日經・深密經等、三論宗・法相宗・真言陀羅尼・禅法等なり。

問うて曰く、迦葉・阿難等の諸の小聖、何ぞ大乘經を弘めざるや。答へて曰く、一には自身堪<sup>た</sup>へざるが故に。二には所被の機無きが故に。三には仏より譲り与へざるが故に。

四には時来たらざるが故なり。問うて曰く、竜樹・天親等何ぞ一乘經を弘めざるや。答へて曰く、四つの義有り。先の如し。

問うて曰く、諸の真言師の云はく「仏の滅後八百年に相当たって、竜猛菩薩月氏に出現して、釈尊の顯教たる華嚴・法華等を馬鳴菩薩等に相伝し、大日密教をば自ら南天の鉄塔を開拓し、面り大日如来と金剛薩埵とに対して之を口決す。竜猛菩薩に二人の弟子有り。提婆菩薩には釈迦の顯教を伝へ、竜智菩薩には大日の密教を授く。竜智菩薩は阿羅苑に隱居して人に伝へず。其の間に提婆菩薩の伝ふる所の顯教は先づ漢土に渡る。其の後数年を経歴して竜智菩薩の伝ふる所の秘密の教をば、善無畏・金剛智・不空、漢土に渡す」等云云。此の義如何。答へて曰く、一切の真言師是くの如し。又天台・華嚴等の諸家も一同に之を信ず。抑竜猛已前には月氏国の中には大日の三部經無しと云ふか。釈迦よりの外に大日如来世に出現して三部の經を説くと云ふか。顯を提婆に伝へ、密を竜智に授くる証文、何れの經論に出でたるぞ。此の大妄語は提婆の欺誑罪にも過ぎ、瞿伽利の狂言にも超ゆ。漢土・日本の王位の尽き、兩朝の僧侶の謗法と為るの由来、専ら斯に在らざるや。然れば則ち彼の震旦既に北蕃の為に破られ、此の日域も亦西戎の為に侵されんと欲す。此等は且く之を置く。

像法に入って一千年、月氏の仏法、漢土に渡来するの間、前四百年には南北の諸師、異義蘭菊にして東西の仏法未だ定まらず。四百年の後、五百年の前、其の中間一百年の間に南岳・天台等漢土に出現して、粗法華の実義を弘宣したまふ。然るに円慧・円定に於ては、国師たりと雖も円頓の戒場未だ之を建立せず、故に国を挙げて戒師と仰がず。六百年の已後、法相宗西天より来たり。太宗皇帝、之を用ゆる故に天台法華宗に帰依するの人漸く薄し。茲に就いて隙を得、則天皇后の御宇に、先に破られし華嚴亦起こって天台宗に勝れたるの由、之を称す。太宗より第八代玄宗皇帝の御宇に、真言始めて月氏より来たり。所謂開元四年には善無畏三蔵の大日經・蘇悉地經、開元八年には金剛智・不空の兩三蔵の金剛頂經。此くの如く三經を天竺より漢土に持ち来たり、天台の釈を見聞して、智発して釈を作つて大日經と法華經とを一經と為し、其の上、印・真言を加へて密教と号し之に勝るの由をいひ、結句は權經を以て実經を下す。漢土の学者、此の事を知らず。

像法の末八百年に相当たって、伝教大師、和国に託生して華嚴宗等の六宗の邪義を糾明するのみに非ず。加之南岳・天台も未だ弘めたまはざる円頓の戒壇を叡山に建立す。日本一州の学者一人も残らず大師の門弟と為る。但天台と真言との勝劣に於ては誑惑と知つて而も分明ならず。所詮末法に贈りたまふか。此等は傍論たるの故に且く之を置く。吾が師伝教大師、三国に未だ弘まらざるの円頓の大戒壇を叡山に建立したまふ。此偏に上薬を持用して衆生の重病を治せんと為る是なり。

今末法に入って二百二十余年、五濁強盛にして三災頻りに起こり、衆・見の二濁国中に充滿し、逆・謗の二輩四海に散在す。専ら一闍提の輩を仰いで棟梁と恃怙み、謗法の者を尊重して国師と為す。孔丘の孝經之を提げて父母の頭を打ち、釈尊の法

華経を口に誦しながら教主に違背す。不孝の国は此の国なり。勝母の閭は他境に求め  
じ、故に青天眼を瞋らして此の国を睨み、黄地は憤りを含んで大地を震ふ。去ぬる  
正嘉元年の大地動、文永元年の大彗星、此等の災夭は仏滅後二千二百二十余年の間、  
月氏・漢土・日本の内に未だ出現せざる所の大難なり。彼の弗舍蜜多羅王の五天の寺塔  
を焼失し、漢土の会昌天子の九国の僧尼を還俗せしめしに超過すること百千の倍、大  
謗法の輩国中に充満し一天に弥るに依って起こる所の天災なり。大般涅槃経に云はく  
「末法に入って不孝・謗法の者は大地微塵の如し」取意。法滅尽経に「法滅尽の時は狗犬  
の僧尼恒河の沙の如し」等云云取意。今親り此の国を見聞するに、人毎に此の二の悪有  
り。此等の大悪の輩は何なる秘術を以て之を扶救せん。

大覺世尊、仏眼を以て末法を鑑知し、此の逆・謗の二罪を対治せしめんが為に一大秘  
法を留め置きたまふ。所謂法華経本門の久成の釈尊、宝浄世界の多宝仏、高さ五百由  
旬、広さ二百五十由旬の大宝塔の中に於て、二仏座を並ぶること宛も日月の如く、十  
方分身の諸仏は高さ五百由旬の宝樹の下に五百由旬の師子の座を並べて敷き、衆星の  
如く列坐したまひ、四百万億那由他の大地に三仏、二会に充満したまふの儀式は、華嚴  
寂場の華蔵世界にも勝れ、真言両界の千二百余尊にも超えたり。一切世間の眼なり。  
此の大会に於て六難九易を挙げて法華経を流通せんと諸の大菩薩を諫曉せしむ。金色  
世界の文殊師利・兜史多宮の弥勒菩薩・宝浄世界の智積菩薩・補陀落山の觀世音菩薩  
等、頭陀第一の大迦葉・智慧第一の舍利弗等、三千世界を統領する無量の梵天、須弥山  
の頂に居住する無辺の帝釈、一四天下を照耀せる阿僧祇の日月、十方の仏法を護持せ  
る恒沙の四天王、大地微塵の諸の竜王等、我にも我にも此の経を付嘱せられよと競望  
せしかども世尊は都て之を許したまはず。爾の時に下方の大地より未見今見の四大菩薩  
を召し出だす。所謂上行菩薩・無辺行菩薩・浄行菩薩・安立行菩薩なり。此の  
大菩薩に各々六万恒河沙の眷属を具足す。形貌威儀、言を以て宣べ難く、心を以て量  
るべからず。初成道の法慧・功德林・金剛幢・金剛蔵等の四菩薩に各々十恒河沙の眷属  
を具足し、仏会を莊嚴せしも、大集経の欲・色二界の中間の大宝坊に於て来臨せし十  
方の諸大菩薩も、乃至大日経の八葉の中の四大菩薩も、金剛頂経の三十七尊の中の十六  
菩薩等も、此の四大菩薩に比校すれば、猶帝釈と猿猴と、華山と妙高との如し。弥勒  
菩薩、衆の疑ひを挙げて云はく、「乃し一人をも識らず」等云云。天台大師云はく「寂場  
より已降今座より已往十方の大士来会絶えず。限るべからずと雖も我補処の智力を以て  
悉く見、悉く知る。而も此の衆に於ては一人をも識らず」等云云。妙楽云はく「今見  
るに皆識らざる所以は、乃至智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云。天台又云はく  
「雨の猛きを見て竜の大なるを知り、華の盛んなるを見て池の深きを知る」云云。例せ  
ば漢王の四将の張良・樊噲・陳平・周勃の四人を、商山の四皓・季里枳・角里先生  
・園公・夏黄公等の四賢に比するが如し。天地雲泥なり。四皓が為体、頭には白雪を  
頂き、額には四海の波を畳み、眉には半月を移し、腰には多羅杖を張り、恵帝の左右に侍  
して世を治められたる事、堯・舜の古を移し一天安穩なりし事、神農の昔に異なら

ず。此の四大菩薩も亦復是くの如し。法華の会に出現し三仏を莊嚴す。謗人の慢幢を倒すこと大風のまたまた小樹の枝を吹くが如く、衆会の敬心を致すこと諸天の帝釈に従ふが如し。提婆の仏を打ちしも舌を出だし掌たなごころを合はせ、瞿伽梨の無実を構へしも地に臥して失を悔ゆ。文殊等の大聖は身を慙ぢて言を出ださず。舍利弗等の小聖は智を失ひ頭を低る。

爾の時に大覺世尊壽量品を演説し、然して後に十神力を示現して四大菩薩に付嘱したまふ。其の所属の法は何物ぞや。法華經の中にも広を捨て、略を取り、略を捨て、要を取る。所謂妙法蓮華經の五字、名体宗用教の五重玄なり。例せば九包淵が相馬の法には玄黄を略して駿逸を取り、史陶林が講經の法には細科を捨て、元意を取るが如し等なり。此の四大菩薩は釈尊成道の始め、寂滅道場の砌にも来たらず、如来入滅の終はり抜提河の辺にも至らず。加之、靈山八年の間に、進んでは迹門の序正の儀式に文殊・弥勒等の發起影響の諸の聖衆にも列ならず、退いては本門流通の座席に觀音・妙音等の發誓弘經の大士にも交はらず。但此の一大秘法を持して本処に隱居するの後、仏の滅後、正像二千年の間に於て未だ一度も出現せず。所詮仏専ら末世の時に限って此等の大士に付嘱せし故なり。法華經の分別功德品に云はく「惡世末法の時、能く是の經を持つ者」云云。涅槃經に云はく「譬へば七子の父母平等ならざるに非ざれども、然も病者に於て心則ち偏に重きが如し」云云。法華經の藥王品に云はく「此の經は則ち為れ閻浮提の人の病の良藥なり」云云。七子の中に上の六子は且く之を置く。第七の病子は一闍提の人、五逆謗法の者、末代惡世の日本国の一切衆生なり。正法一千年の前五百年には一切の聲聞、涅槃し了んぬ。後の五百年には他方より来たれる菩薩、大体本土に還り向かひ了んぬ。像法に入つての一千年には、文殊・觀音・藥王・弥勒等、南岳・天台と誕生し、傳大士・行基・伝教等と示現して衆生を利益す。

今末法に入つて此等の諸大士も皆本処に隱居しぬ。其の外の閻浮守護の天神・地祇も、或は他方に去り、或は此土に住すれども惡国を守護せず、或は法味を嘗めざれば守護の力無し。例せば法身のほつしん大士に非ざれば、三惡道に入られざるが如し。大苦忍び難きが故なり。而るに地涌千界の大菩薩、一には娑婆世界に住すること多塵劫なり。二には釈尊に随つて久遠より已來初發心の弟子なり。三には娑婆世界の衆生の最初下種の菩薩なり。是くの如き等の宿縁の方便、諸大菩薩に超過せり。

問うて曰く、其の証拠如何。法華第五涌出品に云はく「爾の時に他方の国土より諸の来たれる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたる、乃至爾の時に仏、諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまはく、止みね善男子、汝等が此の經を護持せんことを須ひじ」等云云。天台云はく「他方は此の土結縁の事浅し。宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無けん」云云。妙樂云はく「尚偏に他方の菩薩に付せず。豈独り身子のみならんや」云云。又天台云はく「告八万大士とは、乃至今の下の方に下方を召すが如く尚本眷屬を待つ。驗らけし。余は未だ堪へず」云云。經釈の心は迦葉・舍利弗等の一切の聲聞、文殊・藥王・觀音・弥勒等の迹化・他方の諸大士、末世の弘經に堪へじと云ふなり。經に云はく「我が娑婆世界に、自づから六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り。一々の菩薩に各六万恒河沙の眷屬有り。

是の諸人等、能く我が滅後に於て、護持し、読誦し、広く此の經を説かん。仏、是を説きたまふ時、娑婆世界の三千大千の国土、地皆震裂して、其の中より無量千万億の菩薩摩訶薩有って同時に涌出せり。乃至是の菩薩衆の中に四導師有り。一をば上行と名づけ、二をば無辺行と名づけ、三をば淨行と名づけ、四をば安立行と名づく。其の衆の中に於て最も為れ上首唱導の師なり」等云云。天台云はく「是我が弟子、心に我が法を弘むべし」云云。妙樂云はく「子、父の法を弘む」云云。道暹云はく「付嘱とは、此の經は唯下方涌出の菩薩に付す。何が故に爾る。法是久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」等云云。此等の大菩薩、末法の衆生を利益したまふこと、猶魚の水に練れ、鳥の天に自在なるが如し。濁悪の衆生、此の大士に遇って仏種を殖うること、例せば水精の月に向かつて水を生じ、孔雀の雷の声を聞いて懷妊するが如し。天台云はく「猶百川の海に潮すべきが如し。縁に牽かれて応生するも亦復是くの如し」云云。慧日大聖尊、仏眼を以て兼ねて之を鑑みたまふ。故に諸の大聖を捨棄し、此の四聖を召し出だして要法を伝へ、末法の弘通と定めたまふなり。

問うて曰く、要法の經文如何。答へて曰く、口伝を以て之を伝へん。釈尊、然後正像二千年の衆生の為に、宝塔より出でて虚空に住立し、右の手を以て文殊・觀音・梵・帝・日・月・四天等の頂を摩でて、是くの如く三反して法華經の要よりの外の広略二門、並びに前後一代の一切經を此等の大士に付嘱す。正像二千年の機の為なり。其の後涅槃經の会に至って、重ねて法華經並びに前四味の諸經を説いて、文殊等の諸大菩薩に授与したまふ。此等は拈捨遺囑なり。

爰を以て滅後の弘經に於ても、仏の所屬に随つて弘法の限り有り。然れば則ち迦葉・阿難等は一向に小乘經を弘通して大乘經を申べず。竜樹・無著等は權大乘經を申べて一乘經を弘通せず。設ひ之を申べしかども、纔かに以て之を指示し、或は迹門の一分のみ之を宣べて全く化道の始終を談ぜず。南岳・天台等は觀音・藥王等の化身として小大・權實・迹本二門・化道の始終・師弟の遠近等悉く之を宣べ、其の上に已今当の三説を立て、一代超過の由を判ぜること、天竺の諸論にも勝れ真丹の衆釈にも過ぎたり。旧訳、新訳の三蔵、宛も此の師には及ばず、顯・密二道の元祖、敢へて敵対に非ず。然りと雖も広略を以て本と為して未だ肝要に能はず。自身に之を存すと雖も敢へて他伝に及ばず。此偏に付嘱を重んぜしが故なり。

伝教大師は仏の滅後一千八百年、像法の末に相当たつて日本国に生まれ、小乘・大乘・一乘の諸戒一々に之を分別し、梵網・瓔珞の別受戒を以て小乘の二百五十戒を破失し、又法華・普賢の円頓の大王の戒を以て諸大乘經の臣民の戒を責め下とす。此の大戒は靈山八年を除いて、一閻浮提の内に未だ有らざる所の大戒場を觀山に建立す。然る間八宗共に偏執を倒し、一國を挙げて弟子と為る。觀勒の流れの三論・成實、道昭の渡せる法相・俱舍、良弁の伝ふる所の華嚴宗、鑑真和尚の渡す所の律宗、弘法大師の門弟等、誰か円頓の大戒を持たざらん。此の義に違背するは逆路の人なり。此の戒を信仰するは伝教大師の門徒なり。「日本一州円機純一、朝野遠近同歸一乘」とは是の謂

か。

此の外は漢土の三論宗の吉蔵大師並びに一百人、法相宗の慈恩大師、華嚴宗の法蔵・澄観・真言宗の善無畏・金剛智・不空・恵果、日本の弘法・慈覚等の三蔵諸師は四依の大士に非ざる暗師なり、愚人なり。經に於ては大小・権実の旨を弁へず、顯・密両道の趣を知らず。論に於ては通申と別申とを糾さず、申と不申とを暁らめず。然りと雖も彼の宗々の末学等、此の諸師を崇敬して之を聖人と号し、之を国師と尊ぶ。今先づ一

を挙げんに万を察せよ。弘法大師の十住心論・秘蔵宝鑰・二教論等に云はく「此くの如き乗々は自乗に名を得れども後に望めば戲論と作す」と。又云はく「無明の辺域」と。又云はく「震旦の人師等、争って醍醐を盗み、各自宗に名づく」等云云。釈の心は法華の大法を華嚴と大日經とに対して戲論の法と蔑り、無明の辺域と下し、剩へ震旦一国の諸師を盗人と罵る。此等の謗法・謗人は慈恩・得一の三乗真実・一乗方便の狂言にも超過し、善導・法然の千中無一・捨閉閣抛の過言にも雲泥せるなり。六波羅蜜經をば唐の末に不空三蔵、月氏より之を渡す。後漢より唐の始めに至るまで未だ此の經有らず。南三北七の碩徳、未だ此の經を見ず。三論・天台・法相・華嚴の人師、誰人が彼の經の醍醐を盗まんや。又彼の經の中に法華經は醍醐に非ずといふの文、之有りや不や。而るに日本国東寺の門人等、堅く之を信じて種々に僻見を起し、非より非を増し、暗より暗に入る。不便の次第なり。

彼の門家の伝法院の本願たる正覚の舍利講式に云はく「尊高なる者は不二摩訶衍の仏、驢牛の三身は車を扶くこと能はず。秘奥なる者は兩部曼陀羅の教、顯乘の四法の人は履をも取る能はず」云云。三論・天台・法相・華嚴等の元祖等を真言の師に相對するに、牛飼ひにも及ばず、力者にも足らずと書ける筆なり。乞ひ願はくば彼の門徒等、心あらん人は之を案ぜよ。大惡口に非ずや、大謗法に非ずや。所詮此等の狂言は、弘法大師の「望後作戲論」の惡口より起こるか。教主釈尊・多宝・十方の諸仏は、法華經を以て已・今・當の諸説に相對して「皆是真実」と定め、然る後世尊は靈山に隱居し、多宝・諸仏は各本土に還りたまひぬ。三仏を除くの外、誰か之を破失せん。

就中、弘法所覽の真言經の中に、三説を悔ひ還すの文、之有りや不や。弘法既に之を出ださず。末学の智、如何せん。而るに弘法大師一人のみ、法華經を華嚴・大日の二經に相對して戲論・盗人と為す。所詮釈尊・多宝・十方の諸仏を以て盗人と稱するか。末学等、眼を閉じて之を案ぜよ。

問うて曰く、昔より已來、未だ會て此くの如き謗言を聞かず。何ぞ上古清代の貴僧に違背して、寧ろ當今濁世の愚侶を歸仰せんや。答へて曰く、汝が所言の如くんば、愚人は定んで理運と思はんか。然れども此等は皆人の偽言に因って如来の金言を知らず。大覺世尊、涅槃經に滅後を警めて言はく「善男子、我が所説に於て若し疑ひを生ずる者は尚受くべからず」云云。然るに仏、尚我が所説と雖も不審有らば之を叙用せざれと。今予を諸師に比べて謗難を加ふ。然りと雖も敢へて私曲を構へず。専ら釈尊の遺誠に順



つて、諸人の謬釈を糺すなり。

夫、齊の始めより梁の末に至るまで二百余年の間、南北の碩徳・光宅・智誕等の二百余人、涅槃經の「我等を悉く邪見の人と名づく」の文を引いて、法華經を以て邪見の經と定め、一國の僧尼並びに王臣等を迷惑せしむ。陳・隋の比、智者大師、之を糺明せし時、始めて南北の僻見を破り了んぬ。唐の始め太宗の御宇に、基法師、勝鬘經の「若し如来、彼の所欲に随つて方便して説くに即ち是大乗にして二乗有ること無し」の文を引いて、一乘方便・三乘眞實の義を立つ。此の邪義震旦に流布するのみに非ず。日本の得一、稱徳天皇の御時盛んに非義を談ず。爰に伝教大師、悉く彼の邪見を破り了んぬ。後鳥羽院の御代に、源空法然、觀無量壽經の「誦誦大乘」の一句を以て法華經を挿入し、還つて稱名念佛に對すれば雜行方便なれば捨閉閣拋せよ等云云。

然りと雖も、五十余年の間、南都・北京・五畿・七道の諸寺・諸山の衆僧等、此の惡義を破ること能はざりき。予が難破分明たるの間、一國の諸人、忽ち彼の選択集を捨て了んぬ。「根露るれば枝枯れ、源乾けば流れ竭く」とは蓋し此の謂なるか。加之、唐の半ば、玄宗皇帝の御代に、善無畏・不空等、大日經の住心品の「如實一道心」の一句に於て法華經を挿入し、返つて權經と下す。日本の弘法大師は六波羅蜜經の五藏の中に、第四の熟蘇味の般若波羅蜜藏に於て法華經・涅槃經等を挿入し、第五の陀羅尼藏に相對して争つて醍醐を盗む等云云。此等の禍咎は日本一州の内四百余年、今に未だ之を糺明せし人あらず。予が所存の難勢、遍く一國に満つ。必ず彼の邪義は破られんか。此等は且く之を止む。

迦葉・阿難等、竜樹・天親等、天台・傳教等の諸大聖人、知つて而も未だ弘宣せざる所の肝要の秘法は法華經の文に赫々たり。論釈等に載せざること明々たり。生知は自ら知るべし。賢人は明師に値遇して之を信ぜよ。罪根深重の輩は邪推を以て人を輕しめ之を信ぜず。且く耳に停め本意に付かば之を諭さん。大集經の五十一に、大覺世尊、月藏菩薩に語つて云はく「我が滅後に於て五百年の中は解脫堅固、次の五百年は禪定堅固已上一千年。次の五百年は誦誦多聞堅固、次の五百年は多造塔寺堅固已上二千年。次の五百年は我が法の中に於て鬪争言訟して白法隱没せん」等云云。今末法に入つて二百二十余年「於我法中鬪争言訟、白法隱没」の時に相当たれり。法華經の第七藥王品に、教主釈尊、多宝仏と共に宿王華菩薩に語つて云はく「我が滅度の後、後五百歳の中に広宣流布して、閻浮提に於て、断絶して惡魔・魔民・諸の天・竜・夜叉・鳩槃荼等に其の便りを得せしむること無かれ」と。大集經の文を以て之を案ずるに、前四箇度の五百年は仏の記文の如く既に符合せしめ了んぬ。第五の五百歳の一、豈唐捐ならんや。随つて當世の爲體、大日本國と大蒙古國と鬪争合戦す。第五の五百に相当たれるか。

彼の法華經の文を以て此の法華經の文を推するに「後五百歳中広宣流布、於閻浮提」の鳳詔、豈扶桑國に非ずや。彌勒菩薩の瑜伽論に云はく「東方に小國有り。其の中に唯大乘の種姓のみ有り」云云。慈氏菩薩、仏の滅後九百年に相当たつて、無著菩薩の請に赴いて中印度に來下して瑜伽論を演説す。是或は權機に随ひ、或は付囑に順ひ、或



は時に依って権経を弘通す。然りと雖も法華経の涌出品の時、地涌の菩薩を見て近成を疑ふの間、仏、請に赴いて寿命品を演説し、分別功德品に至って地涌の菩薩を勸奨して云はく「悪世末法の時、能く是の経を持つ者」と。弥勒菩薩、自身の付嘱に非ざれば之を弘めずと雖も、親り靈山会上に於て「悪世末法時」の金言を聴聞せし故に、瑜伽論を説くの時、末法に日本国に於て地涌の菩薩、法華経の肝心を流布せしむべきの由、兼ねて之を示すなり。肇公の翻経の記に云はく「大師須梨耶蘇摩、左の手に法華経を持ち、右の手に鳩摩羅什の頂を摩でて授与して云はく、仏日西入って遺耀將に東に及ばんとす。此の經典、東北に縁有り。汝慎んで伝弘せよ」云云。予、此の記文を拝見して両眼滝の如く、一身悦びを遍くす。「此の經典東北に縁有り」云云。西天の月支国は未申の方、東方の日本国は丑寅の方なり。天竺に於て東北に縁有りとは、豈日本国に非ずや。遵式の筆に云はく「始め西より伝ふ、猶月の生ずるが如し。今復東より返る、猶日の昇るが如し」云云。正像二千年には西より東に流る、暮月の西空より始むるが如し。末法五百年には東より西に入る、朝日の東天に出づるに似たり。根本大師の記に云はく「代を語れば則ち像の終はり末の初め、地を尋ぬれば唐の東羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、鬪争の時なり。経に云はく、猶多怨嫉況滅度後と。此の言良に以有るが故に」云云。又云はく「正像稍過ぎ已はって末法太だ近きに有り。法華一乗の機、今正しく是其の時なり。何を以て知ることを得ん、安樂行品に末世法滅の時なり」云云。此の釈は語美しく心隠れたり。読む人之を解し難きか。伝教大師の語は我が時に似て心は末法を示したまふなり。大師出現の時は仏の滅後一千八百余年なり。大集経の文を以て之を勸ふるに、大師存生の時は第四の多造塔寺堅固の時に相当たる、全く第五の鬪争堅固の時に非ず。而るに余処の釈に「末法太有近」の言あり。定んで知んぬ、鬪争堅固の筆は我が時を指すに非ざることを。

予、情事の情を案ずるに、大師、薬王菩薩として靈山会上に侍して、仏、上行菩薩出現の時を兼ねて之を記したまふ故に粗之を喩すか。而るに予、地涌の一分には非ざれども、兼ねて此の事を知る。故に地涌の居士に前立ちて粗五字を示す。例せば西王母の先相には青鳥、客人の来たるには鴉鵲の如し。

此の大法を弘通せしむるの法には、必ず一代の聖教を安置し、八宗の章疏を習字すべし。然れば則ち予所持の聖教多々之有りき。然りと雖も両度の御勸気、衆度の難の時、或は一巻二巻散失し、或は一字二字脱落し、或は魚魯の謬悞、或は一部二部損朽す。若し黙止して一期を過ぐるの後には、弟子等定んで謬乱出来の基なり。爰を以て愚身老耄已前に之を糾調せんと欲す。而るに風聞の如くんば、貴辺並びに大田金吾殿の越中の御所領の内、並びに近辺の寺々に数多の聖教あり等云云。兩人共に大檀那たり、所願を成ぜしめたまへ。涅槃経に云はく「内には弟子有って甚深の義を解り、外には清浄の檀越有って仏法久住せん」云云。天台大師は毛喜等を相語らひ、伝教大師は国道・弘世等を恃怙む云云。

仁王経に云はく「千里の内をして七難起こらざらしむ」云云。法華経に云はく「百由旬

緒の衰減無からしむ」云云。国主、正法を弘通すれば、必ず此の徳を備ふ。臣民等、此の法を守護せんに、豈家内の大難を払はざらんや。又法華經の第八に云はく「所願虚しからず、亦現世に於て其の福報を得ん」と。又云はく「当に今世に於て現の果報を得べし」云云。又云はく「此の人現世に白癩の病を得ん」と。又云はく「頭破れて七分と作らん」と。又第二の巻に云はく「經を誦誦し、書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して結恨を懷かん。乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」云云。第五の巻に云はく「若し人惡み罵らば、口則ち閉塞せん」云云。伝教大師の云はく「讚ずる者は福を安明に積み、謗ずる者は罪を無間に開く」等云云。安明とは須弥山の名なり、無間とは阿鼻の別名なり。国主持者を誹謗せば位を失ひ、臣民行者を毀訾すれば身を喪す。一国を拳つて用はずんば、定んで自反・他逼出来せしむべきなり。又上品の行者は大の七難、中品の行者は二十九難の内、下品の行者は無量の難の随一なり。又大の七難に於て七人有り。第一は日月の難なり。第一の内に又五の大難有り。所謂日月度を失ひ時節反逆し、或は赤日出で、或は黒日出で、二三四五の日出づ。或は日蝕して光無く、或は日輪一重二三四五重輪現ぜん。又經に云はく「二の月並び出でん」と。今此の国土に有らざるは二の日、二の月等の大難なり。余の難は大体之有り。今此の龜鏡を以て日本国を浮かべ見るに、必ず法華經の大行者有らんか。既に之を謗る者に大罰有り。之を信ずる者何ぞ大福無からん。

今兩人微力を励まし、予が願ひに力を副へ、仏の金言を試みよ。經文の如く之を行ぜんに微無くんば、釈尊正直の經文、多宝証明の誠言、十方分身の諸仏の舌相、有言無実と為らんか。提婆の大妄語に過ぎ、瞿伽利の大狂言に超へたらん。日月地に落ち、大地反覆し、天を仰いで声を発し、地に臥して胸を押さふ。殷の湯王の玉体を薪に積み、戒日大王の竜顔を火に入れしも、今此の時に当たるか。若し此の書を見聞して宿習有らば、其の心を発得すべし。使者に此の書を持たしめ、早々北国に差し遣はし、金吾殿の返報を取りて速々是非を聞かしめよ。此の願ひ若し成ぜば、崑崙山の玉鮮やかに求めずして蔵に収まり、大海の宝珠招かざるに掌に在らんのみ。恐惶謹言。

下春十日

日蓮花押

曾谷入道殿

大田金吾殿